

本與錄

乾

9
3310
1



49
3310
2-1



本與錄卷之上



水去五味均平蔵

岡白駒 著

一書經曰。惟天地萬物。父母。惟人萬物靈也。一曰。天地陰陽五行之氣を以て。万物を生ず。無情は山川草木。有情は人物禽獸蟲魚也。さうして人を最を貴物とす。さうして情の中にて人を最靈なるものなり。人の智能ありて。天地の道。一切の事の理をさす。萬物をさすの理

本與錄 卷之上



を保たぬ。万物の盡とふなり。夫天地の万
物を生育する此本なり。たゞ草木
穀此種子を土に植せば必生じて成長
す。花さき実の系。是故に天地の万物此
父母といふなり。是れ天地の生育を以て
心とす。聖人天を則りて。民を治め
万民を安んじ。其生育を遂ぐむを仁
といふなり。人君は天を奉じといふも
仁なり。

一人の萬物の盡とて。智恵才能の質を
生れはげとも。其智恵才能を成就するを
學ぶて。生あるものふあをも。連珠
此歴は。天下此至寶なりとも。其みづから
時の璞の瓦礫と相如し。或は生れたる
能智恵ある人。いふは發明なりとも。聖
人なるぬ凡人をかなるも。思遠多く。まは
邪智をせゆく。是故に孟子も非義
之義非禮之禮といふ。是れ其心も十分

本與録 卷之上

是とねのひ。十分義とねのひも。是れ禮
義よあつれを。大よちのひ多る事多し。たを
一は權あし。經ををり。度あし。寸尺を
をり。がとや。才智ある人も。己の善惡を
つら。んえがと。故に聖賢は道を權度と
を。昔者伏羲神農黃帝堯舜禹湯文
武周公孔子。これ教聖人子億万人に
を。智恵才能を。人の及を立
給ふ。これをゆあびて。人の人。ところれ義理

を志す。諸侯は明君となり。卿大夫以下庶
人の。人となふ。これ人の禽獸も異なる。不
義物の靈をも。不なり。若し象昧し。徳
義を。ぬい。天の我を生さる。本さよ。宵くなり
一凡天下は廣大なる。其人幾千億兆
を。救ふ。きき。を。内して。上一人より諸侯
卿大夫となる。人カよ。我。日本六十
餘列の肉も。徳侯は負い。何種かを
。是天命を。つて人君となる。なり。

本 録 卷之二

故又書經曰天陰隲下民ヒツカニナダムといふ。是ハ人君となり。卿大夫となり。下士ドミシ民となり。皆天のささむる事なり。各其分を守り

分をささむといふ。射イキをささむといふ。小い大をささむ。是

理の當然なり。即天の順シタガフ此道なり。我

日本の風習ナラハシ是をささむ。動輒ヤモスレバ武士此一分を

なす。小事をも忍シび。身を亡シさるる。

是ハケフシヤ俠者此風フウなり。君子ラトコダテ此風をささむ。君子

といふ。下民を治る身分なり。

下として上を望む心なく。射イヤレつて事を終オハる。

ふをささむ。是ウクをささむ。此天命をささむ。ぬを

命をささむ。いなり。されを天命といふ。天此

仰オホセをささむ。いなり。天ものいふ。いなり。け

人は身を生れ。天命をささむ。天命をささむ。いなり。

孟子も人君を天使チシといふ。天の役人ヤクニン

いふ。古人の教ヲシユも。人君となるをささむ。

一分のたえ。ちのささむ。天の命を蒙カウラフりて。

け氏を治る。むる役人とせめて。天の代
りて民を治る。天を敬し。天を畏る。身を
慎むを。人君奉天敬天と云なり。天を敬し
天を畏る。人。永く國家を保ち。子孫繁
昌と。是釈氏因果此説と似せんと。さふ
あぢ。書経曰。天道福善禍惡。易経曰。積
善之家有餘慶。積不善之家有餘殃
といふ。是聖人の教なり。釋氏因果の説
一己此上と云なり。たとへば父母の惡業

ありとも。其子善行なれば。父母此善惡の
拘らる。聖人易経此文の積善之家や
子。之家と云。子孫を期する。辭なり。善人
其身不福なれば。子孫も必福あり。惡
人其身禍なれば。子孫も必禍あり。歴
史此載る不往く。其論あり。是儒釋此分
なり。
一昔性子といふ。漢人。齊は國。一齊
侯と見ゆ。齊侯性子と志侯た。此を

具録
二
五

問ひたまへ。性子あつて曰。國君を立る
 也。國の爲なり。玉を立る。君は爲まざる不
 あらざる。けきを能くし給ふ。國を治ふ
 事と能くし給ふ也
 一凡物皆各職分あり。犬の夜を守り。
 鶏の晨を報さるも。亦各職分なり禽獸
 性うけざる。いんや人なめてをや。於
 ち君を奉ふ。忠を盡くを職分と
 人君一國の主として。民を治るを職分とす。

一人君也なり。一國此上又た一人。事此
 是非道理をきく。叶をぬ事なり。天下此
 事理多端。いんや才智教明たり。是も
 生れたる。いんや志る。ぎを理なり。孔子終日食
 ちて思案。終夜の寐をて思案を
 やすも。學ぶ。いんや。能くし給ふ。聖賢の虫
 を讀む。びて。まを。き。是を式として。
 萬事れ。いんや。邪。正道。いんや。行
 なり。土民は學ぶ。いんや。但。是れ上を標準

小なるものなり。たゞ一民に因る。無理に
 なるものあれば。上へ訴て。上は決断する。
 無理非道をさせぬなり。生よる人。事の
 是非及理を以て。いづれ判断なきこと。
 人君と。下民は標準となるものなれば。その
 文性むづい。上所好。下有甚焉と聖
 人此戒なり。是ハ一人の好む不。下風
 俗となりて。意好といふなり。たゞ一人君
 学問を好免ば。一家中も亦学問をこれみ。

一は此風俗となりて。文字いふに
 自然と不義無道を以て。不風なる。
 人君遊興を好み。一家中も。國中は去民
 といふまで。其風俗となり。人君華美奢
 侈を好み。一家中も自然と奢
 風となり。下は民といふまで。分を以て。
 花を好み。奢侈に究る不足なり。不足
 の究る。必非義無度をなす。非義無度は
 究る。國家を以て。必至其勢なり。を以て

何たりんるふなり。人君儉約なれど。下風
倍となり。分限をこえど。分を守まば。衣食
不足。故又管子曰。衣食足して仁義起
り。倉廩充てり。禮節を知。争ハ不足よりと
起り。讓るは餘あるより生じたり。故又
左氏母の如く。年々万事華美なるを
儉約を以て持せむ。世のなりゆくまゝとほせ
ぬ。上下に窮困。無道の基なり
一儉約をむく。空をむく。儉約と吝嗇

空似く非なるものなり。儉約といふ。其分をうら
むるをいふ。空なり。人君は人君に分際あり。卿
大夫は卿大夫に分際あり。其分をこえる
を吝嗇といふ。其分よりうらむるを儉約といふ。
吝嗇といふ。其分よりうらむるを吝嗇といふ。其分
儉約の名を依て。吝嗇を行ふもの多し。吝
嗇なるものは必ず仁にして。慥刻なるものなり。
儉約の名を以て。志をむく。人情をづれ
く。人の苦をも顧む。人の心をあはれもの也。

是亦又孟子も為富不仁なりや。儉
 約を吝嗇此分。是亦又辨を事也。凶徳と
 盛徳との界なり。吝嗇の人必不仁と云ふ一
 一風倍は自然なりゆきまゝにて。是を人
 君此教化と云ふ。號令を以て禁制するは。
 其威權を恐る。表向はうくらとも心服せむ。
 たとへば旱き時。井水を汲く。回園
 又灌溉する。一時は旱枯を救ふ
 少いとも。終に五穀草木此生長を遂む。

風化はた。雨は。油然として雲を
 起し。沛然として雨を降す。是らるる如し。五
 穀草木此英發。井水は。此は。亦。亦。亦。
 教化も。亦。一國此風倍。義理を重んず。道
 義此。強國と云ふ。孫子。兵
 書。有道此。攻。利を
 得。一學問此要。二。聖人此道を明。三。
 得。次。古今此治亂。達。け。

要ととも。道ハ六經論語此志をも不是なり。治
 乱此跡は。歴史是なり。歴史ハ史漢通鑑
 然なり。及よあきまのなるべし。義理よりく。
 歴史をよまされ。古今の得失よりし。

六經は易詩經書經春秋二禮なり。書經ハむし

聖人賢臣とたがひの政務をとり給ひ。を事これ

聖人のなまけ。事迹其議論これ聖人の言

史官きき。をきて。萬代此道となれ。易經ハ。

りて占筮此書也。聖人辭を係たす。吉凶

存亡進退の理備なり。詩經ハ。りて民間此歌
 謡なり。當時上此政事此得失。民此情も感
 ト。うん。ものなり。人君ハ九重此深き内も居
 ぐ。民此何り。人情をきり。人情も通
 せられた。政を施し。詩經ハ。りて人情も
 通き。りて。りて。りて。りて。春秋
 ハ。魯國此史記なり。孔子筆削し。左丘明と
 り人傳を代りて。其事實をきり。是當時諸
 侯此得失詳なり。通鑑ハ。春秋よりきて。

近世まて此事跡を志する者なり

一 大抵人の生れれば、質れまきて、聖人れ
 道を学ばれ、生長するも、志こころひ、利欲な
 れ。ふ義無道なりゆを。是れ一ありて、人情
 なり。荀子のこれを見て、人の性、悪なるものなり。
 ゆゑ、聖人を立、教をまけて、生れよま
 が、一むとらり。習性となふ。学ひて、勤れを。
 善人よなめ、理あり。孟子のこれを見て、人
 其性中、又善を備てある。人れ性、善善也

やいつり。或い学をまきて、天性、孝悌忠信
 なる人もあれども、是れ子百人中、れ一人なり。
 大抵、皆、一きこころひ、ゆゑ、ものなれを。
 聖人の教を学ばせ、かたはぬら、聖なり。但、學
 びてなるを。人の性、よくうつるものなり。孔子も
 上智と下愚とあり。うつるものなり。上智
 也、下愚の人の多う、うつりて、皆中人、衆け
 れを。上智、下愚、れあり。も、あは、性、うつる
 ものなり

一論語曰。性相近。習相遠。習成性也。いり。是の人の性。かあもどくも悪なるも。善なるも。始の善なく。悪なく。あづて。是れをさとも。此なれども。習ひのゆて。善悪懸隔遠し。但なしく。も。是の性のゆて。是を習成性ともふ。成といふ。學びて。本就き。その善こと。事なり。古に。賢哲。善を修む。道を求む。空しく。凡倍れ。了簡。その信。よくし。

但此境界又造者き。といり。其初は。中きて。道よき。善を修む。久し。をなす。たれぬ。自然に。善を修む。たのみ。なる。す。た。他の。難事なり。初に。修む。のみ。修む。久し。をなす。後。を。表。し。い。ん。や。聖人。人情。を。さ。び。て。を。修む。人。は。か。あ。も。ど。く。な。れ。た。も。境。界。よ。く。ば。必。た。の。み。を。な。す。なり。人。は。心。の。善。理。を。も。ら。ぶ。もの。なり。

一 學問をこのめば。自然に智恵あはらう。然
 る義理をまじり。朝夕 聖賢と事をはまじり。聖
 賢又まはれあはらう。教をうくることば。中華ハ堯
 舜の代より。凡そ千六七百年に於て。我 日本ハ
 神武より凡そ二千餘年。其間の治乱得失。
 終つて是事。おなじことなる。今んことば。一
 世に久しきをふりよけねども。我身の身を歴する
 うごやう。是學問をこのむの長壽なり。是
 もたのしむべきなり。

一 學問は品流あり。聖賢は書を讀。且教を
 體認して。平生に心持し。孝悌忠信のつと
 めをたぬ。凡そ萬事は處置。皆義をたつて。ぬを
 こし。是を實學とす。又專ら詩文を好む。
 博く事をまじり。詩文ハ。まじり
 學文化英華なり。されば實學なるぬを
 人あはれども。そのむが事なり。たゞ一 禰學なり
 とも。書をまじり。他の遊をまじり。かまはれ。凡
 書ハ。雜書たりとも。義理を説くものなれば。

之を讀む。人心の盡。自然に感悟するあり。
 利害をきれば。むして悪事いせぬなり。若し人書
 をよみ。学問をきれば。其人の迹カウセキをかくれば。
 人の論語もこれ論語のまじり。そのまじり。其
 友人規キて曰。そのまじり。書をよむのは是非も
 さまじりなり。かゝる迹のあるまじり。まじり
 といへば。他人感悟カンゴして。迹をあはれ。善
 人となりければ。友人大に賞嘆シヤウタンして。まじりなり
 一人の諧歌キヤウカをよむてをく。其まじり。論語よみ

此論語のまじり。論語よまじりの論語よ
 まじりなり。まじりのまじり。非義を及な
 るは。論語よまじり。論語よまじり。一生善人
 なる期あり。出カナシむ。まじり。其
 あり。色欲シキヨクをわけ。人倫ニンリンの礼をう。酒
 をよみて。本業を廢ハイ。武藝ブゲイを枕昔古せ。て
 戯タフム遊ユひ。の。月日を送る。まじり。まじり
 といひ。其罪シ已レ一分。まじり。人の言
 なり。但表面より。まじり。まじり。

ことごとく。疵^{キヅ}なきもののみをゆめども。不學無術。義
 理をきくまじ。日夜利欲の中を漂^シて。大概若悪
 とんまきれども。賄賂^{マインナヒ}ありて。是を非^ヒまげてひ
 なし。人々の私のをいさめて。あををよまよ
 なるも。隠^{イシ}悪^{アク}なるもの。非義無及のちらふまじ。是
 亦いふ行迹^{ツカサ}のあぬまじ。悪人ともよものなり。就
 甲^{ツカサ}役義を掌^{ツカサ}るもの。右^{ツカサ}神^{ツカサ}の人あれば。万事の
 とうとうとひ。皆^{ツカサ}君の威^{ツカサ}権^{ツカサ}をうけて。執^{ツカサ}行^{ツカサ}
 ゆゑま。主^{ツカサ}君^{ツカサ}の努^{ツカサ}力^{ツカサ}くまぬ事^{ツカサ}を。下^{ツカサ}に然^{ツカサ}れ。

此忠心を養ふこと。それらの人物を困^{ツカサ}穢^{ツカサ}とい
 なり。人君の心をほくごまごこ
 一人君は要道^{ヤウドウ}三つあり。けこのは万事備^{ツカサ}。
 一曰^{ツカサ}驕奢^{キヤウシャ}を戒^{ツカサ}む。二曰^{ツカサ}寛裕^{クワンユウ}人を容^{ツカサ}。三曰^{ツカサ}能^{ツカサ}
 人をま^{ツカサ}。能^{ツカサ}者の言^{ツカサ}。よま味^{ツカサ}るあやうし。人君
 一玉はま^{ツカサ}なり。一人の身の上をま^{ツカサ}りなま^{ツカサ}ば。まの
 富^{ツカサ}もま^{ツカサ}なり。一國は風俗やなり。
 欲^{ツカサ}み玉^{ツカサ}を貧^{ツカサ}しくし。非^{ツカサ}義^{ツカサ}をなま^{ツカサ}其^{ツカサ}基^{ツカサ}をなま^{ツカサ}。寛
 裕^{ツカサ}人を容^{ツカサ}とい。人君一人の下知^{ツカサ}をめて。下^{ツカサ}に

是よりさうぞ。為愛^シは心^ハをさく。刻薄^{コクハク}は嚴^{ケン}
 重^ス又^ス過^スれを^レ下^レ場^シと^ス。為愛^シは仁^ニの^ハ場^シあり。
 いさゝか^ハは事^トも^シゆる^カほど。毛^ヲを^レ吹^テ疵^ヲを^レ求^メむ^ルは。
 必^ズ慥^ニ刻^シなる。昔^シ尹文^{インブン}とい^フる賢人^{ケンジン}は齊^{サイ}の
 宣王^{センワウ}。人君^{ニンクン}の要道^{ヤウダウ}を問^ハは^レる。大道^{ダイダウ}容衆^{ヨウシュウ}大徳^{ダイトク}
 容^ル下^レけ^ル二^ツ而已^ニと^ス。一^ツも^シ是^ナなり。むご^ク下^レ
 を^レ虐^シを^レ不^レ仁^トと^ス。故^ニとい^フる。一^ツあり。明君^{メイクン}は必^ズ
 大度^{ダイド}なり。論語^{ロンゴ}に。上^ノ君^ノて^ハ寛^クなる^{コト}を^レば。
 主^ノ除^クは^レる^{コト}な^ル。た^ラむ^{コト}とい^フる。談^ニ曰^ク。萬事^{マンジ}從^フ

寛^ク其^ノ福^ヲ厚^クし^テい^フる。寛^ク裕^ク
 とも^シり^テ偏^ニな^レた^{コト}。下^ノより^テ上^ヲを^レ恐^レ怖^スさ^スる^{コト}な^ク。
 輕^クん^ドて^ハ命^ヲを^レむ^クとい^フる。但^シ為愛^シの^ハ心^ヲを^レさ^スる^{コト}
 して。い^はく^もみ^も失^ハを^レど。罰^ヲを^レさ^スる^{コト}事^ハ。嚴^ニ又^シ四^ツ訓^ニ
 威^ヲを^レ下^レに^シて^ハ人君^ノの^ハ正^シ直^ニなる^{コト}。人君^ノ
 の^ハ正^シ直^ニとい^フる。心^ヲを^レさ^スる^{コト}。小心^{シヤウシン}なる^{コト}を^レさ^スる^{コト}。正^シ直^ニと
 つ^クあ^らむ^{コト}。凡^ソ事^ハは^レ處^ヲ置^ク私^ヲを^レ公^ニと^ス。
 く^もい^はさ^なく。道義^{ダウギ}を^レ以^テ。其^ノ理^ヲを^レさ^スる^{コト}。ま^もこ^しの
 法^ヲを^レさ^スる^{コト}。書^ハ經^{キヤウキョウ}決^{ケツ}範^{ハン}小^シ正^シ直^ニ剛^{カウ}

克柔克を人君此三徳といふ。克舜此代
 も。刑罰を廢せど。一種の人あり。教も禁
 制もあつたがぬやうに。刑を以て教を助
 けしむ。一を事ハ嚴きを剛克といふ。
 其尤もこのなきべき事ハ。尤もなきを柔克といふ。
 剛克柔克此二ツを私なく。をいさなく。道義を
 以て執行すを。正直といふ。正直を以て。私なく
 けん。女以邪も入ることなく。讒言佞奸此を
 いるも。人至此私より起り。け三徳。皆慈愛

柔克を主ともといひ。是寛裕のいふなり。能
 人を主ともい。いふほど發明の人主たりとも。一玉
 の大なる。事のみを。一人の身もて治るもの
 あり。一玉を治るもの。有司を以て
 治るなり。主官職も。主才智。其徳行の人を
 用ひぬを。けをいふなり。知人といふ。克舜此
 聖も。この事と宣り。故に人主たる身ハ。學問
 して。是非善惡を言得し。人情世態をまもる。
 然して私なく。心いさなく。あまをせぬ。

人此邪シヤ正セイ正セイ正セイ。凡人此君又仕る。
 君の機嫌キケンを伺ひ。主心の好むところを察サツす。
 兎角又君の心よかなふ極キョク。さきものなれば。うかと
 見れど。皆善人君子のごとく。是故又是ゼ又
 似て非ヒなるもの多し。表向オモテムキよきと見え。内心
 あしき者。よつとごころ。大侮オウブツ評の國賊コクゾクなり。
 古賢はたれえよ。大抵人の怨ウラミをくひ。其平生
 又んごころ。人の氣キを伺ウカガひ。そのよきとあらよ。
 愜カナふ極キョクよきとあら。元來うらやまのゆゑ。終ハシる

其御ミをあつそ。其本生のところ。んんん
 のなり。平生よんんん。たれよそ人。親オヤよ
 孝コウ弟テイよ。兄弟よきとあら。交コウ友ユウ又信シンありて。あら
 たのり。一か中の人。おんんん人と評判ヒョウバンさる。
 是善人なりと見え。されを聖賢の言
 にも。忠臣チュウジン必ズ孝コウ子シれ門カドよ求モトむと宣ノタメつり。親オヤよ
 不孝フコウ又兄弟よきとあら。うらやま。交コウ友ユウ又信シンありて人
 と。君よ仕シて不忠フチュウ必ズ然ゼンなり。不孝フコウ不フ信シン此人コノヒト君
 又忠チュウありとあら。決ケツしてなき理リなり。又天テン性セイ

むごま。なまひあまありけ人。なまひあふ忠なり
 としり。忠にうらなく。中心のままを盡し。己
 の事をまもはる。人の事をまもはる。露塵
 私を忠と云。忠人の徳行のくべし事。
 殊更人臣ハ君ははて主君に代りて事を執
 りしものなれ。忠を人臣の大徳とまなり。
 忠ハ君臣の間の危とのこし。おしをさ事。
 日用人倫又交する人。忠なくてまご。論語
 小為人謀而不忠乎と。曾子此身を省

しもけりなり。是ハ大概此人の忠なり。
 人心面のさし。其不種々多けれ。人自
 たる身ハ学問をのめて。まろく人情世態を會
 得し。黙してまもまも。大概之をほす。但
 公なまを。人を新り難し。位下又役等を申
 付る。其人多侮奸私ある人なれ。下は殃
 を蒙る甚し。凡有月ハ君の威権を以てけり
 事なれ。たし十分此無理非道なりとも。君命
 なれ。是れあく義れ。人情のなれ。怨をま

一。其人私の甚恨を以て。君命をかりて。
 人をさしなえ。己の心の憊みなり。又賄賂を以て。
 非を是とせしむ。類天下往く事なきこと。是皆を
 役人の女曲^{カシキヨク}として。義理をさしむ。至極の殘忍
 ありか。の^{カシキヨク}。志^{カシキヨク}を。人を用る。必人を^{ムコキ}を
 要^{ムコキ}として。さしむ。却て人を得る
 一。故に聖賢。人をさしむ。大法ありて。徳を一人
 におもひしむ。なり。是一人の一身の上。ゆき
 なりとも。一徳あるものなり。何も^{カシキヨク}一人の身。

そなもる人を求て。得。一徳より
 一。事あるは。さしむ。一を。さしむ。て。
 その餘い。小疵を。さしむ。聖賢。
 人を用る。大法なり。孝悌忠信。さら
 げども。役を命を。さしむ。才を。さしむ。才は忠信より
 出る才を。忠信なり。才も邪智なり。用る
 又た。凡政事を執り。人。才を。さしむ。心
 忠信なり。下れ患害多し。是故に孔子も
 多也。魯也。愚也。思。け二人。孔門

本居録 卷之二 二十九

七十子其間の實哲なれども。其忠信なる事少き
 べし。魯なり。愚心なりと宣ひ。叔夏を殺せし
 魯もあきど。但政を執て其ふ。生才經を思魯
 と宣ひ。孔子子貢の汝と顔回といふものゆ
 る。問ひ給ひ。子貢顔回の徳は又服せざ
 して。一を問て。才を知らず。服せぬ。政事を
 執つ。上は論なり。仁ハ大徳なり。七十子其賢
 も。顔回の外。仁徳をゆゑし。いハなく。其れ
 ども。孔子必用仲。仁をゆゑて。其徳迹を

是より給ふ。人にも徳を一人のみ求む。其
 此義なり。其つなぐ。いハなく。其れ
 たりとも。不孝不悌の人。刻薄此人。其れ
 不忠不孝なり。人信うて不忠。其れ
 益もあきど。其れ大法此中其用。大抵道義を以て。人を治る。其れ。いハなく。かざ
 して。身を立る事。其れ。自然。其れ。人。其れ。風俗
 となるゆゑ。其れ。三箇條を人。其れ。其れ。其れ。

ことごとく其人を用ひて。修して其功を著せしむるを
 書経曰。狎侮君子罔以盡心
 といふ。け君ありて。在位の役人をいふ。其人
 を重んじて。狎侮らざらば。うちまのせぬ。其人
 心を盡さざるといふことなり
 一人をえらびて。孝悌忠信を準繩とす。
 孝悌忠信は中庸此徳とて。聖人の居
 る基なり。中庸とて。さういふと卑くのこと。愚
 夫愚婦も。好むべきを。かくあつてかぬ

ちぬるを。聖人といふ。賢者いふ。ことごと
 くと就を。不肖者いふ。心てなつこと。ゆゑに。中
 道といふ。庸の常なり。平常の常といふことなり
 べきに及ぶ。ゆゑに。是を中庸此徳といふ也。
 孝悌忠信此徳。孝を主とす。父子此徳は。
 天性とす。幼穉あり。自然に父母を慕ふ
 ことあり。聖人といふより。孝此徳を立以
 書経に。孝を主とす。堯萬國を惇和。終
 も九族を親むる始。九族を親むるは。

父母より孝より推して其親族を親しみ。一玉を化して終に天下も和と。是を業。困憫和と。万国。孝悌忠信此風俗も相和して天下太平なり。是を堯此仁徳なり。是故に論語曰。孝弟也者其為仁之本與。孟子も仁之實事親是也といひ。孝悌忠信を以てこれを仁者といふも是なり。悌は兄弟を以てしをいふ。孝なれどをのづから悌なり。忠は

上より下とせし。上は下も信なれど。孝悌も孝悌あり。信の及ばず。上も信たす。その言と。身の新ひものたす。ぬを信たす。是勿論なり。いま信の及ばず。信の徳は。人より信せざるを主とす。我も信徳なく。それ言なれど。人信せど。民無信不立といふ。民を信するをいふなり。人君もそれ號令を以て。民を欺さる。民上を信む。信の及ばず。一切も通じたり。

孝悌忠信を以て人を乞ふ取。孝悌忠信
を以て國を治め。孝悌忠信を以て人を教
化す。聖人の道。け外別ある事。ゆゑに堯
舜之道者孝悌而已矣といふ

孝悌錄卷之上 終

Handwritten notes and a red seal at the bottom left of the page.

